

カレッジ・ソシアリゼーションの

もたらす役割葛藤

—feminine role 研究から大学文化論へ—

柴 野 昌 山

I 高等教育経験の意味

一般に教育は、保守的機能と創造的機能という相反する志向性をもった社会的機能をもつといわれるが、このうちいずれがより優勢なはたらきを示すのであろうか。このことは社会変動において果す教育の役割を考えるとき自ら明らかになる。A. K. C. オッタウェイは、この問題について、「教育的変化は社会変動に従うものであって、教育は新しい社会的必要に適応するための社会の窮極的な機能の一つである¹⁾」と述べている。教育は、いつの時代においても社会的要請に対応して必要とされ、社会変化におくれて出てくる文化的適応の一形式である。このことは基本的に正しい。K. マンハイムも同じく、「教育の主要目標は、通例、基底的な社会的一致を達成することにある。それは、社会がつねに過去の中に模索している行動雛形を直接的伝統によって伝達する²⁾」という。このように教育の基本的機能は、社会秩序の維持、伝達、一致を目的とする均衡・維持機能にある。だが同時に、教育がもう一つの創造的、変革的機能を果さないならば、社会は固定化し、柔軟性を失う。そこで教育は、潜在的または二次的にその機能を行使する。普通それは、諸個人の人格変容を通してしか実現されないから可視性は低く、したがってひとびとの注意をひくに至らないが、社会の若返りに果す教育の役割は無視できない。

教育が社会変化に先行して、それを導くように作用するのは、社会が解体的危機に陥った場合や急激な価値体系の転換が行なわれる場合である。そのとき社会は、いかなる方向へ進むかは別として、ともかく当面の解体的危機を克服し、社会の再組織と均衡回復の必要に迫られる。「教育は、その拠所として何ら現実の状況が存しないときには、空虚な説教となるが、これに反し、それが同方向（社会的再建の方向——筆者注）に動いている社会的諸力と結合するときは、変化過程を促進する³⁾」のである。従って再組織と均衡回復のために教育は、既に解体した価値的の原

1) Ottaway, A. K. C. *Education and Society: An Introduction to the Sociology of Education*, 1955, 51.

2) K. マンハイム（福武直訳）・変率期における人間と社会・みすず書房・昭和42・336頁。

3) K. マンハイム・前掲書236頁。

理に基づいてではなく、新しい方向と原理に基づいて旧体制を変革しながら再統合を試みようとするのである^④。このことは危機的状况においてばかりではない。急速な技術革新が進行する現代の大衆社会においても（それに対応すべき教育制度が産業界から要請されるとはいえ）、全体として現実的要請を超えたより未来的な見地からの変革者（innovator）の形成が要求され、教育は新しい価値創造を主要な任務とするようになる^⑤。また、低開発国における教育の先行投資的機能は、言うまでもなく、知的労働力の生産による社会変動の促進化にある^⑥。

教育制度の段階的類型と対応させて教育の社会的機能を考えるならば、保守的機能は、初等、中等教育段階において優位を占めるのに対し、創造的機能は、主として高等教育段階において優勢になる。というのは初等、中等教育は文化伝達と性格形成に重点がおかれ、高等教育は知的自由と真理の探究を主要な目標とするからである。このことから高等教育においては、社会変化に対応する適応的学習は二次的なものとされ、独自の原理に基づく教育変化が起こるのである。P・W・マスグレイブは、これを自律的变化（autonomous change）と呼び、それは固有な法則に従う文化変動の一局面であるという。とくに大学は、それ自体において目的的な新しい知識や観念を追求するもので、社会の商業的期待や政治的意図と無縁であることを原則とする。第二に、ひとびとの教育経験が長くなることは、それによってかれらの価値観、趣味、思考様式に変化を与える。第三に、そのことがひとびとをして多様な文化に接触させることになり、従って多様な価値態度を発達させるのである^⑦。

結局、高等教育は、制度的にいった他の教育機関と同じく、選別（selection）と社会化（socialization）の機能をもつものであり^⑧、基本的に人員を社会機構の必要部位に配分（allocation）するための選別機関にすぎないが、それと同時に、高等教育経験を経ることによって、諸個人が先に述べた多様な人格変化と社会変化の素因を獲得するという点が重要である。すなわち、高等教

④ フランス革命後の混乱を解消するために唱えられたサン・シモンの社会改良主義、A. コントの実証哲学による社会再組織案、また K. マンハイムによる自由のための計画等、すべて危機を媒介としている。さらに敗戦後デモクラシー原理による我が国の教育的再建の方向も、教育が社会変化を促進しようとした一つの例である。A. コント（平山高次訳）、実証精神、創元社、昭23、*Discours sur l'esprit positif*, 1844。井伊玄太郎、フランス社会思想史、理想社、昭34、168頁。仲新「アメリカ教育使節団」教育社会学辞典16～19頁参照。

⑤ R. M. ハッチンスは、新しい価値を創造し、価値の変化をもたらすのが教育の本来の役割であるという。R. M. ハッチンス（笠井真男訳）「教育と人格」（永井道雄監修）現代人の教養(1)エンサイクロペディア・ブリタニカ社・昭43。また T. ブランメルドの reconstructionism などが出て来る背景には、教育体系が既に社会経済的現実を左右する戦術的な決定因（determinant）として成長している事実があるといえよう。T. ブランメルド（松浦・山中訳）来るべき時代の教育——新しい目的と強力な手段——、慶応通信・昭41。Floud, J. & A. H. Halsey, "Education and Social Structure", in Simpson, R. L. & I. H. Simpson, (eds.), *Social Organization and Behavior*. 1964., 142.

⑥ J. ベズイ。M. ドブレ「教育発展の経済的側面」A. H. ハルゼー編、経済発展と教育——現代教育改革の方向——, *Education, Economy and Society: A Reader in the Sociology of Education*, 1961. 24-28.

⑦ Musgrave, P.W., *The Sociology of Education* 1965. 139-141.

⑧ Parsons, T., "The School Class as a Social system", in *Social Structure and Personality*, 1964. 130～134.

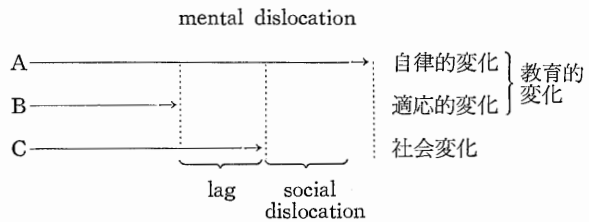
育経験は、第一に職業的技術や知識によって社会適応を効果的にするが、第二に、それにとともに教養を高め、人間性を豊かにし、視野を広め、多元的立場を容認する態度形成に貢献する⁹⁾。この後者の視点は重要である。高等教育によって教養が高まり、視野が広くなるということは、寛容な態度 (tolerance) が形成され、権威主義的行動に走らないという保証を与えるとともに、伝統や権威からの解放と知的自由によって既成の秩序に対する懐疑と反逆を行なう可能性を与えることでもある。もちろんすべての高等教育経験者が批判的態度をもつとは言えないのであって、その中でとくに「知識人」という資格をそなえた人間だけがその可能性をもつにすぎないだろう。だが、一般にこのような高等教育経験と批判的態度との間にはかなりの相関を認めることができるのではないだろうか¹⁰⁾。われわれは、以下に述べるささやかな資料からこの事実を考えていくことにしたい。

II 意識の地すべり現象

物質文化と適応文化との差異的变化から文化的遅滞 (cultural lag) が生起する点について既に W. F. オグバーンは指摘した¹¹⁾。この基本的見解を社会変化と教育変化との関係に移して考えてみよう。先に述べたように教育変化は社会の変化におくれて随伴的に生起する。教育の公共性や教育目的の容認性といわれる保守的側面が必然的にこの事態をもたらす。つまり、この「教育的遅滞」は、教育が平均的な社会的要請に

対応して変化するよう条件づけられていることに由来する (図1)。だが同時に、教育は、教育体系の内的、外的条件によっては創造的機能を発現し、自律的变化を遂げようとする。それは、いわば真理に基づいた本質的要請にこたえるもので

第1図 社会変化と教育変化



あり、また社会変化を先取して本来的見地からの要請に対応するものであると言える。それはある意味で歴史的必然の予測に基づいて変化を促進するものである。ここにおいて、現実の社会変化に対応している教育変化に規定された社会的性格 (適応型) と自律的教育変化によって促進的に形成された社会的性格 (変革型) との間に葛藤が生れることになる。適応型と変革型の社会的性格は、諸個人の異なる性格類型として出現する場合と同一個人の中に共存する場合とがある。教育階梯を登って社会のエリート機構の中へ編入され、安定した市民生活に依存している青年た

9) 大学卒業生の大学観を通してこのことは裏付けられる。また教育程度が高くなるほど権威主義的態度は弱くなる傾向が指摘される。拙稿「大学教育に対する社会的期待と効果」京大教育学部紀要・昭40。Kornhauser, W., *The Politics of Mass Society*, 1960, 68-73.

10) S. M. リブセット (内山秀夫訳)・政治のなかの人間——ポリティカル・マン——, 創元新社・昭38, 第10章「アメリカの知識人」。

11) Ogburn, W. F., *Social Change*, 1922. Maclver, R. M. & C. H. Page, *Society: An Introductory Analysis*, 1952, 574 ~ 587.

ちは適応型であり、発明や発見に熱中したり、批判的態度でもって創造活動に精を出す青年、また社会改革をめざす活動家たちは変革型であろう。だが多くの場合、高等教育経験は、多かれ少なかれ適応型とともに変革型の要素を添加するものであって、高学歴者ほど内的葛藤の悩みを経験する可能性は強い。つまり、社会的次元においては、既存の社会構造と変革的部分との地すべり（dislocation）現象が起こるだけでなく、それは諸個人の意識にも反映して、諸個人の内部でも意識の地すべり現象または断層、葛藤現象をひき起すのである。これは社会変化が急速であればあるほど大きく、また教育的遅滞が大きければ大きいほどそれに比例して大きいだろう。そして、意識の地すべり現象は、役割意識の対立、葛藤となって現実化する。つまり、社会における役割期待をどのように受けとめ、どのように役割行動に移すかの問題である。

III 女子学生の役割意識

女性が高等教育を受けることによって、伝統的な女性の役割に対する態度がどのように変化するのか、については、一つの仮説がある。それは、高等教育経験によって女性は伝統的な女性の役割（feminine role）に対して批判的となり、男性と同等の近代的役割（modern role）をとるようになるというものである。ゴールドセンらは、アメリカの女子学生を調査して、ほとんどの女子学生が「婦人の仕事は家庭にある」という伝統的価値に反撥し、条件つきではあるが、できるならば社会において仕事をもちたいと望んでいるという。そして、この傾向は成績の良い学生ほど強く、既存の価値に対する非同調的態度をもつ傾向があるという¹²。われわれは、このような一般的傾向が、我が国においてどのような状態を示すのかについて、名古屋市内の某私立女子大学（A大学と呼ぶ）と某公立大学（B大学）の女子学生を対象として調査した。この調査のうち、大学教育に対する意識調査の部分は既に発表した¹³、本論文の資料はそれと密接に関連している。

A大学とB大学の学生が属する社会階層（主観的所属意識による）は、ともに中流階層がほとんどであるが、A大学の場合、「中の上」と答えたものが半数であるのに対し、B大学では「中」が約半数である。父親の最終学歴は、A大学において、大学卒が多いかわりに小学卒（高小を含む）もかなり多いのに対し、B大学では小学卒大学卒はいずれも少なく、中学卒が多い、父親の職業では、A大学に管理的上級職、中小企業経営者が多いのに対し、B大学では、それらにくらべて自由業、技術的、事務的職業のものが多（注13、45～4頁参照）。これらのことから、A大学の女子学生はB大学の女子学生よりも、かなり階層的に上位の家庭から出ており、経済的にもかなり裕富な企業主を父親としていることが伺われる。それに対して公立校としてのB大学は、いわゆるサラリーマン家庭の出身者が多い。これは大学進学動機において差となつてあらわれる。A大学では「より高い教養」を身につけるという教養本位または他律的な進学態度が多いのに対し、B大学では「専門的・技術的知識」を身につけるためという目的型が多くなる。また、

12) Goldsen, R. K. et al, *What College Student Think*, 1960. 46～53.

13) 拙稿「女性の役割と大学教育」金城学院大学論集（社会科学編）・1967、33号・37～68頁。

ちなみに自家用車通学生の数について調べたところA大学では約30%の率に上っている（学生課調べ）。卒業後の進路は、B大学において約60%は就職を意図しているのに対し、A大学ではわずか45%にとどまり、あとは家事手伝い、おけいこに従事する。

二つの大学の性格は、大学の教育理念やカリキュラム編成によることもさることながら、入学者の家庭的背景によって大きく決定されるようである。もちろん、入学者は、それぞれの大学の性格をイメージに描いて選択するのであるから、大学が入学者を選別するわけであるが、この二つのものは循環的に一定の選別—選択体系をつくり上げ、入学者によって大学のカラーが代表されるようになる。かくして現実にはA大学は、ブルジョワ的、お嬢さん学校的という校色を、B大学は、地味で職業婦人型というカラーを付与されることになるのである。このように性格を異にする二つの大学において、次のような質問を試みた。全部で14問のうち、6問についてだけ結果を述べる。

- 家庭を守り子供を育てるのが女性の天職か、それとも男性に伍して、職場で働くべきか、いろいろな議論があります。私たちはみなさんの御意見をきくことによって、このような女性と家庭、職場に関する諸問題を考えたいと思います。

第1表 「女性は家庭に入るべきか、社会に出て働くべきか」という議論についてお考えをうかがいますが、あなたは次のどれを理想として選びますか。

	1	2+3	計
A 大学	16	55	71
B 大学	3	71	74

$$\chi^2=10.8691 \quad p<0.001 \quad d.f.=1$$

1. 家事、育児、その他家庭生活の管理に専念する。
2. 社会に出て自分の仕事、職業に専念する。
3. 家庭生活とともに社会的活動にもたずさわる。

第2表 「もし将来、家事・育児を国家や社会が引き受けてやるようになるとすれば、それについてあなたはどのように思われますか」。

	1	2	3	計
A 大学	42	6	20	68
B 大学	31	25	13	69

$$\chi^2=1.9654 \quad p=0.50 \sim 0.30 \quad d.f.=2$$

1. 家事・育児は、やはり妻・母親の仕事であり、そこに女性のよこぎがある。
2. 家事・育児は国家や社会が引き受けて、それらの雑事から解放された女性は、職場に進出すべきである。
3. 家事・育児を国家や社会が引き受けても、女性は必ずしも職場に出る必要はなく、残った時間は自分で自由に使うのがよい。

問1は、家庭本位、社会本位、両立型のうちからどれか一つを選ばせるものであるが、両グループとも両立型がほとんどで、社会本位型は僅少であった。だが、家庭本位型がA大学に多く(21.6%)、B大学に少なかった(4.1%)ことから、両者の間に有意な差が生れた。問2は仮定の上に立った設問であるが、ここでは家事・育児など伝統的な *feminine role* を容認するものとともに多く、両者の間に有意な差はみられない。B大学における問1と問2の答の食い違いは、恐らく *feminine role* を女性に帰属的 (*ascribed*) な役割として受容する(問2反応)ものの、理想としてはそれから解放されたい(問1反応)という要求のあらわれと解釈できよう。このことは、問3の理想的な男性像または妻の立場からの夫に対する役割期待において明確にあらわれ、A大学の家庭本位性とB大学の仕事本位性は対照的である。つまり、A大学生は、表出的役割

第3表 「あなたは、次のうち(少し極端に考えて)いずれの男性が、夫として理想的であると思われるか。」

	1	2	計
A 大学	29	12	41
B 大学	34	3	37

$$\chi^2=5.6064 \text{ } p<0.02 \text{ } d.f.=1$$

1. 家庭をかえりみなくてもよいから、仕事に専念する男性。
2. 仕事よりも家庭により重点を置き、家庭を大切にする男性。

(expressive role) を、B大学生は手段的役割 (instrumental) をとりたいと欲するのである。この手段的役割は、われわれの文化においては本来男性に期待される役割であり¹⁴⁾、従ってB大学の女子学生は反伝統的な役割意識をもつ傾向があるといえる。

また社会的な場において、一般に期待されている女性的役割 (お茶くみ) をどのように受けとめるかを問4から考察すると、上役から要求された場合、同僚からの場合、いずれにおいても両グループの間に有意な差がみられた。両グループとも、同僚よりも上役から要求された場合、より高い同調反応を示すが、明確な否定的反応はA大学に少なくB大学に著しい。このような伝統的役割に対する拒否的態度は、この場合だけでなく、恐らくあらゆる生活の局面において一般化され、近代的役割取得を主張することになろう。

表6は、家庭の中で普通女性がやるべき仕事と考えられているものを列挙し、それに対する積極的—否定的—消極的な役割意識を調べたものである。およそ社会には役割行使を規定する規範体系があり、それは命令的—禁止的次元 (prescriptive-proscriptive dimensions) の連続体によって社会の機能的統合に関与している¹⁵⁾。だが、命令的規範にもとづく役割期待をそのまま受容 (同調) するか、それを拒否 (逸脱) するかは、社会意識と個人的役割意識の変化によって左右される。(命令的規範が禁止的規範へ転化することはほとんどあり得ない。それは、長期的または急激な社会変動を媒介しなければならない)。

第4表 次のような場合あなたならどうされますか。またどう感じますか。「女性が職場において、仕事のお茶をいれるように上役から要求された場合……」

	1	2	計
A 大学	71	2	73
B 大学	45	19	64

$$\chi^2=19.0806 \text{ } p<0.01 \text{ } d.f.=1$$

1. やる、しかたなしにやる
2. やらない

第5表 同僚から言われた場合……

	1	2	計
A 大学	55	11	66
B 大学	39	23	62

$$\chi^2=6.5403 \text{ } p<0.01 \text{ } d.f.=1$$

1. やる、しかたなしにやる
2. やらない

14) Parsons, T. & R. F. Bales, *Family: Socialization and Interaction Process*, 1955, また核家族の中での役割分化は Instrumental leadership, expressive leadership の区別としてもとらえられる。Zelditch, M. Jr., "Role differentiation in the Nuclear Family: A Comparative Study", in Parsons, T. & R. F. Bales, *Ibid.*, 307-15,

15) Mizuchi, E. H., "Norm Qualities and Differential Effects of Deviant Behavior: An Exploratory Analysis," *Amer. Sociol. Rev.* Vol. 27, No. 3 1962.

第6表 「女性の役割」に対する役割意識

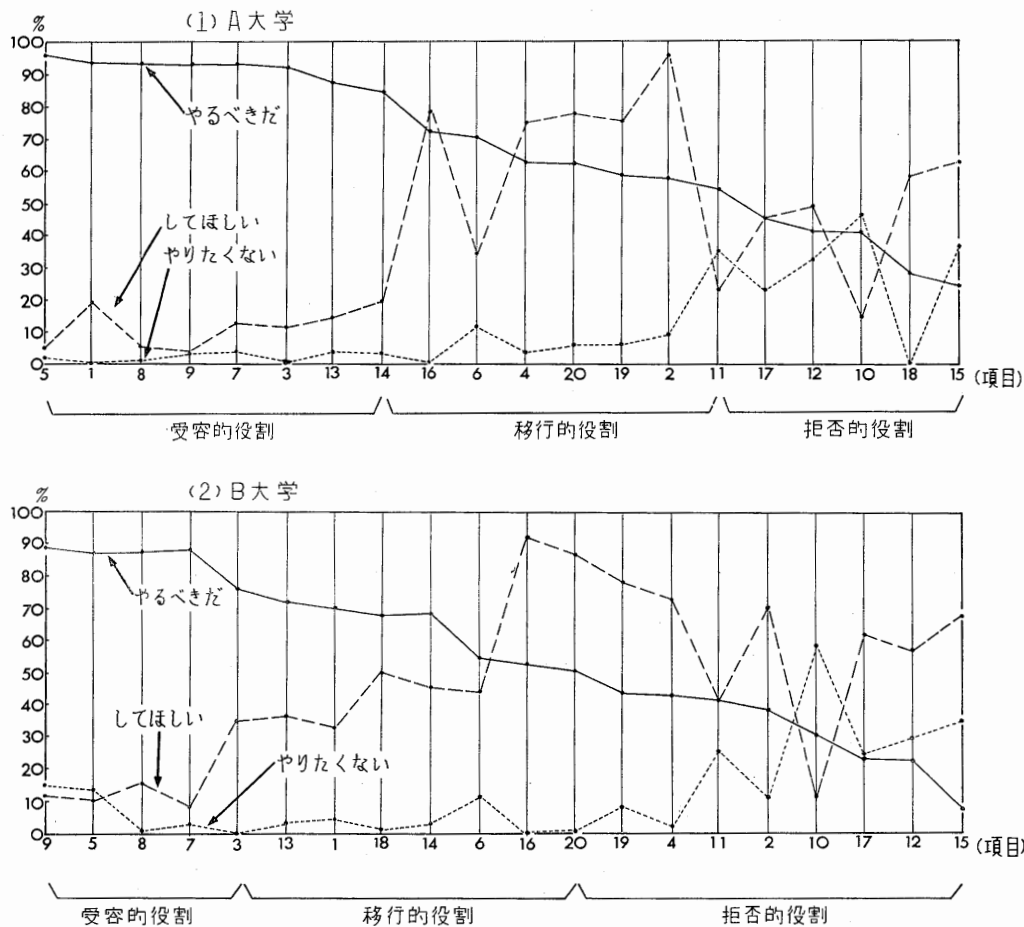
	私立 A 大学			公立 B 大学			順位		A-B 大学間の有意差
	積極的にやるべきだ	やりたくない	夫にもしてほしい	積極的にやるべきだ	やりたくない	夫にもしてほしい	A大学	B大学	
1. 食後のかたづけ	93.2	0.0	18.9	70.3	5.4	33.8	2	7	
2. フトンの上げ下し	58.1	9.5	96.0	39.2	10.8	69.9	14	16	
3. 部屋の掃除	91.9	0.0	10.8	75.7	0.0	35.1	6	5	
4. 庭の掃除	62.2	2.7	74.3	43.2	2.7	73.0	11	14	
5. おかずの買物	96.0	1.4	4.1	87.8	1.4	10.8	1	2	
6. 夫の靴をみがく	70.3	10.8	33.8	55.4	10.8	44.6	10	10	
7. 子供の友達にお茶を出す	93.2	4.1	12.2	87.8	2.7	8.1	5	4	
8. 夫の友人同僚にお茶を出す	93.2	1.4	5.4	87.8	1.4	16.2	3	3	
9. 夫や家族の靴下の洗濯	93.2	1.4	2.7	89.2	14.9	12.2	4	1	***
10. 夫の同僚上役の奥さんとの交際	40.5	46.0	13.5	31.1	58.1	10.8	18	17	*
11. 近所の人との交際	54.1	35.1	23.0	41.9	27.0	40.5	15	15	
12. 家畜の世話	40.5	32.4	48.7	23.0	29.7	56.8	17	19	*
13. 家計のやりくり	87.8	4.1	13.5	71.6	2.7	36.5	7	6	
14. お風呂の用意	83.8	2.7	17.6	67.6	2.7	46.0	8	9	
15. 夫の洗顔の用意	24.3	36.5	62.2	8.1	35.1	67.6	20	20	**
16. 子供の相談にのる	71.6	0.0	78.4	54.1	0.0	90.5	9	11	
17. 子供のみるテレビ番組を選ぶ	45.5	23.0	46.0	25.7	27.0	60.8	16	18	*
18. 乳幼児の入浴	28.4	0.0	58.1	68.9	1.4	50.0	19	8	
19. 子供の勉強をみる	59.5	6.8	75.7	43.2	9.5	79.7	13	13	
20. 家庭の団らんの中心になる	62.2	6.8	77.0	50.0	1.4	86.5	12	12	

(註) *** $p<0.01$, ** $p<0.05$, * $p=0.20\sim0.10$

図2は、積極的反応の多い項目から順に並べ見やすいようにしたものである。これによれば、一般に「女性の役割」と考えられているものが必ずしも個々の女性にとっても同様に「とるべき役割」として認知されていないこと、役割によっては、かえって拒否されるものもあることが分る。つまり、役割期待と役割意識のズレが存在する。われわれは、このズレの大きさから「女性の役割」を類型化することができる。いまかりに、積極的に選択された率が80%以上のものを「受容的役割」、80~50%のものを「移行的役割」、50%以下のものを「拒否的役割」というふうと考えてみた。これをA・B両大学に関して比較すると、A大学では受容的役割が多く(8個) B大学では少ない(5個)、移行的役割は同数であるが、拒否的役割はB大学に多く(8個) A大学に少ない(5個)ことが分る(図3参照)。

受容的役割は、消極的反応や夫の援助を期待するものが少ないが、移行的役割になると急激に夫に対する援助の期待が高くなる。項目6を除いて、いずれの項目でも協力期待が高く、A大学では項目2、B大学では項目16において最高である。だが「やりたくない」という拒否反応はこ

第2図 役割意識にもとづく役割類型

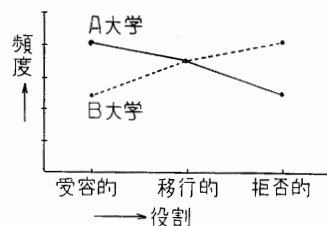


ここではまだ少ないが、拒否的役割では、積極的反應へ接近し、ある場合には（項目10、15など）それを超えている。同時に夫への協力期待も高くなり、項目10を除いていずれも積極反應率以上の高さを示している。

移行的役割とは、従来受容的に考えられ、妻の仕事というふうの規定されていたものが、今後は夫にもしてほしいと考えられる可能性のあるもので、妻ないし女性の側から言うならば要求的役割といってもよいものである。全体として見た場合、受容的役割が少なく、移行的（要求的）役割や拒否的役割が多いこと、さらにB大学ではこの傾向が一層つよいことが分る。これによっても feminine role が決して受容されてはいないことが伺われる。

従来文化人類学においては、男性、女性の役割がどのように文化的に規定されているかについて詳細な研究がなされてきた。男性と女性の役割が明確に区別され、性的分業にもとづいて役割

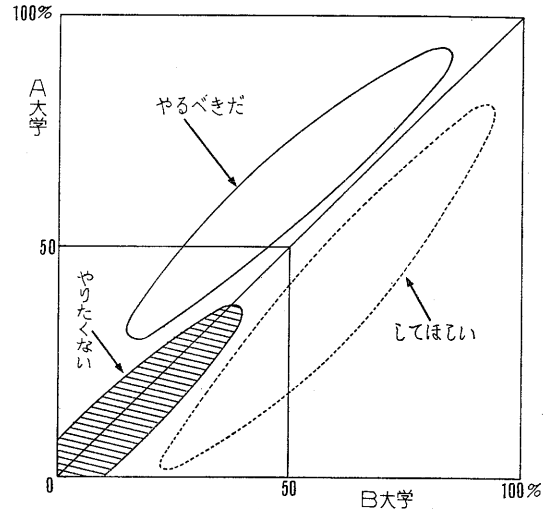
第3図



規定が見られるのは、文明度の低い未開部族に多く、文化的多様性の発達に応じてその区別はあいまいになるようである¹⁶⁾。文明と文化の発達は、性的分業をあいまいにし、男性の優位と女性の従順、戸外労働と家庭内労働という差異を小さくするが、にもかかわらず欧米の性的役割の変化を見てもこの変化はそれほど大きいものでなく、基本的に変更されたとはいえないようである。もちろん平等への要求と能力主義の主張によって生物学的な決定論は後退したが、それと反比例して女性の役割葛藤が増大したことは間違いのない事実である¹⁷⁾。

役割意識の変化は、個人がおかれた社会・文化的环境の価値規範体系に原因し、それに左右される。A・B両大学の差は、まさにこのことを証明している。そして、二つの集団における役割意識の差は、社会、文化的条件が変化すれば、「女性の役割」と考えられているものは拒否的役割、移行的役割、受容的役割の順にそれらが批判され、疑問視されてくるだろうことを示唆している。図4は、縦軸にA大学をとり、横軸にB大学をとって、それぞれの項目がいずれの大学的女子学生にとってより魅力的であるか、また逆にどの程度反撥的である

第4図 役割パターンの分布と傾き



かを示している。これによると、受容的役割は、A大学において、つねにB大学よりも高い率で選択されていること、夫の協力を期待するのは、つねにB大学的女子学生であること、拒否的反応は両大学とも僅少であり、ほぼ同率であること、等が分る。つまり、A大学的女子学生は、すべての項目にわたって、B大学の彼女らよりも積極的に役割規定を受け入れる傾向があるのに対して、B大学では積極性は低くなり、協力的期待が増加する傾向にあるということである。

このような役割意識の差異がカレッジ・ソシアリゼーションといかに関係するかについては後に述べるが、いずれにしてもここに役割意識の地すべり現象が見られることは事実である。だが、役割意識の変化は、すべての「女性の役割」一般に対して起るものではないことが重要である。役割には、役割取得に関して本質的な部分と本質的でない部分とがあり、その本質的部分は正しい、望ましい役割として規定される¹⁸⁾。従って、規定的役割 (prescribed role) と考えられるものは、社会にとっても不可欠と見なされることから、これに対する役割意識はあまり変化しない。

16) Stephens, W. N., *The Family in Cross-Cultural Perspective*, 1963, ch. 6, 278-288. 男性的役割は主として, mental working, weapon making, hunting, など, 女性的役割は, cooking, water carrying, grain grinding, などである。

17) Seward, G. H., *Sex and the Social Order*, 1946. 143. 246 ~ 249.

18) T. M. ニューカム (森・万成訳)・社会心理学・培風館・昭32・280~281頁。

というのも役割意識は、その社会の役割期待と対応関係にあり、しかも役割期待には権利と責任の観念が付随しているからである。ひとたびとは、他者の期待を予想して役割をとるとともに、他者が予想に従うことを期待するのである¹⁹⁾。このような役割期待の体系にイデオロギーが付随し、役割意識はイデオロギー的に理解される。そして、役割意識はある個人的な事柄とは考えられず、政治的・社会的政策と関連して急進的イデオロギー、穏健な漸進的イデオロギーのいずれかに分類することを余儀なくされる²⁰⁾。

役割意識がイデオロギーと絡んでくるということは、それが役割選択に優先順位をつけるという日常的な仕事処理の問題になるにとどまらず、社会意識に関する内的葛藤の問題になるということである。とくに大学教育の中では、女性の社会的地位を歴史的、社会的に考察する思考態度を養うことから、伝統的イデオロギーを批判し、急進的イデオロギーを受け入れる傾向になりやすい。この傾向はA大学よりもB大学においてより著しいだろう。R. K. ゴールドセンらも、就職および近代的役割をとることを希望する女子学生 *career girl* ほど創造的で自己実現の可能性のある仕事 (*goal value career*) を求めるという²⁰⁾。彼女らは従って男女平等の原則を貫こうとする。この態度がカレッジ・ソシアライゼーションの結果形成されたのか、家庭的背景のゆえに元来持っていた態度傾向なのか、については意見が分れるだろう。われわれの調査では、A大学、B大学の性格を特徴づけるものは大学生活の様態如何以前に、入学者の家庭的背景であることが明らかにされた。つまり、大学の性格と入学者の家庭的背景とは対応関係にあった。このことから、役割意識の差異を規定するものは家庭における価値観の体系であって、カレッジ・ソシアライゼーションはそれを補強するにすぎないという仮説もなりたつ。だが翻って考えるならば、両大学の女子学生の母親は、旧世代に属する女性としてかなり類似した価値態度をもっており、そのような母親によってソシアライズされたという意味で彼女らが家庭の中に留まっていたならば恐らくこれほど急進的な態度変化は起こさなかったであろうと思われる。

ちなみに、問2に対する母親の反応は表7のようにほとんど差は見られないのに対し、女子学生の間の差は著しい。これは世代の差がB大学において著しくあらわれたということではなく、やはりB大学におけるカレッジ・ソシアライゼーションが強く影

第7表 二つの役割期待に対する親子の反応

	学 生			母 親		
	1	2	3	1	2	3
A 大 学	56.8	8.1	27.0	75.3	5.5	16.4
B 大 学	25.0	50.0	16.7	58.3	8.3	20.8

響を及ぼしたと考えるのが妥当であろう。価値観や態度における世代の違いということになれば、A・B両大学ともに、女子学生は自分の母親との間に差異を見出している(表8～表14)。選挙や

19) T. R. サービン(土方文一郎訳)「役割の理論」・社会心理学講座(I) みすず書房・昭31・8頁。

20) この観点からの sex role 論には、次のものがある。Dahlström, E., "Analysis of the Debate on Sex Roles", in Dahlström, E. (ed.), *The Changing Roles of Men and Women*. 1962. 170～205.

21) Goldsen, R. K., *op. cit.*, 56.

表 8 料理の仕方や食べ物の嗜好

	－	＋	計
A 大 学	40	33	73
B 大 学	45	29	74

(註) (－)……非常に違う, やや違う
(＋)……ほとんど違わない (以下同)

表 9 お客さんに対する応待の仕方, 話し方

	－	＋	計
A 大 学	53	19	72
B 大 学	50	24	74

$\chi^2=8.5711$ $p<0.01$ d. f.=1

表10 主人・夫に対する態度, 話し方

	－	＋	計
A 大 学	50	20	70
B 大 学	51	21	72

表11 お金の使い方, 買物の仕方

	－	＋	計
A 大 学	51	22	73
B 大 学	44	29	73

$\chi^2=1.4766$ $p=0.30 \sim 0.20$ d. f.=1

表12 お中元, お歳暮をすることについての考え方

	－	＋	計
A 大 学	43	28	71
B 大 学	50	24	74

表13 儀式, たとえば結婚式のやり方についての考え方

	－	＋	計
A 大 学	40	30	70
B 大 学	51	23	74

表14 選挙や政治問題に対する考え方

	－	＋	計
A 大 学	57	15	72
B 大 学	67	7	74

$\chi^2=2.6853$ $p=0.20 \sim 0.10$ d. f.=1

政治問題に対する考え方では著しく世代差がみられる。

このように女子学生は, 男子学生よりも, 家庭においては世代差はあるとはいえ, 様々の拘束によって母親のもつ伝統的態度への同調を強いられている P. ウォーリンは, アメリカの女子学生でさえも, 両親や同胞の意見によって, 自分のやりたいこと, 将来の計画が影響を受けるという事実を報告している。ちなみに女子学生自身と母親との意見の相違は 29.9%あるという²²⁾。これは, feminine role と modern role との対立葛藤を示すもので, 彼女らが高等教育を受ければ, この対立葛藤はますます大きくなることを示しているのである。もっとも学生という時点における「女性の役割」意識が, 成人後の役割意識と同一であると考えてよいかどうかについては疑問もあろう。A. M. ローズは, 女子学生が, その社会的地位の過渡性から大人の役割期待を不明確にしか意識しておらず, 子供, 家事, 市民生活, 職業についての役割意識は明確さを欠いているという²³⁾。われわれの調査は仮定の上での反応を調べたものであり, とくに役割の項目は, 家事,

22) Wallin, P., "Cultural Contradictions and Sex. Roles: A Repeat Study", *Amer. Sociol. Rev.* Vol. 15, No. 2. 1950, 288-293.

23) Rose, A. M., "The Adequacy of Women's Expectations for Adult Role," *Social Forces*, Vol. 30, 1951, 69-77.

育児、家庭内の補助的仕事に限られたため、社会的活動、経済活動に関する役割意識は除かれている。このように feminine role と考えられている狭い範囲の役割に限定して考察したが、それを通して feminine role に対する評価が modern role とより対照的に浮かび上って来たとも言える²⁴。ともあれ、一たん形成された態度傾向は、それと対立的な態度意識と葛藤するとはいえず、容易に弱体化するとは考えられない。とくに大学文化または学生文化の中で、それは相互に強化され、支持を得て近代的な信念体系の要素として定着する。それは、一種のイデオロギー転換でもある。

IV 大学文化と社会化効果

今まで主として女子学生のカレッジ・ソシアライゼーション効果について述べてきた。今われわれは男子学生に関する実証的データをもたないが、女子学生の場合から推察して一つの仮説をうち立てることを試みたいと思う。男子学生と女子学生とでは、カレッジ・ソシアライゼーションの効果にどのような相違があるだろうか。恐らく男子学生の方が社会化効果は大きいだろう。なぜなら、女子学生は、彼女らの家庭がもつ価値規範によって拘束される度合いが大きく、たとえば態度変化を表してもそれを引き戻すメカニズム (feedback mechanism) がいろいろな生活場面で働くと思われるからである。つまり、女性に対する伝統的、既成的価値体系の拘束力は男性に対するよりもはるかに強く、持続的である。M. ミードは、男性の期待する女性像に、女性が適応するよう仕向けられるのは、男性社会の強制によるとばかり言うことはできない。それはある意味で両性間の意見の基本的一致によって起る現象であるという²⁵。それだからこそ「女性の役割」に関する役割期待は持続的で女性の一般的態度を規制するように働くのである。また女性は子ども時代から母親への同一視を通して女性的態度を内面化するよう訓練され、同調的態度を強化される。これに対して、男児は、自立的、独立的態度を期待されることから、家庭的な価値規範から離脱し、成功と出世へと動機づけられる²⁶。これは、社会的活動や職業生活と連続しているから、開いた社会意識を形成するのである。このようなわけで、男性は女性よりも社会変化に対応

24) ハーブストは、家族内での男女の活動を household duties, child control and care, social activities, economic activities の四つに分けている。また、小山隆らは、役割区分を監護指導 (しつけなど)、家事、経済活動、余暇利用、対外活動、宗教的行動、夫婦和合の7項目に分けた。そして、妻として、夫としての「決定的役割」が次第に減少する傾向にあるという。さらに重要なことは、妻の役割行動は夫の期待にもとづかぬ慣習的行動であることが多いという現実である。このことは妻の役割規定の変化によって、伝統的役割が拒否される可能性も大きくなることを意味するのではなからうか。Herbst, P. G., "Task Differentiation of Husband and Wife in Family Activities" in Bell, N. W. & E. F. Vogel (eds.), *A Modern Introduction to the Family*, 1960. 339～346. 小山隆編・現代家族の役割構造——夫婦・親子の期待と現実——培風館、昭42、8—15頁。

25) M. ミード (田中寿美子・加藤秀俊訳)・男性と女性(下)——移りゆく世界における両性の研究——創元社、昭36、68頁。

26) Parson, T. "Age and Sex in the Social Structure of the United States," *Amer. Sociol. Rev.*, 7, Oct., 1942, 604～616. Parsons, T., "Certain Primary Sources and Patterns of Agression in the Social Structure of the Western World," in *Essays in Sociological Theory*, Rev. ed., 1954.

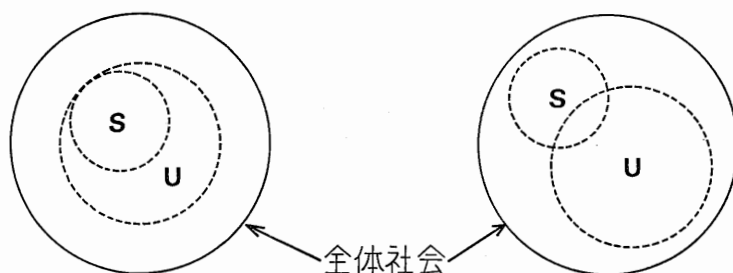
した進歩的価値を受け入れやすい態勢におかれているといえる。

大学社会の中で、学生の態度変化や意見形成に対してより効果的な機能をもつものは、講義や研究などの課程内活動よりも、それ以外の課外活動 (extra-curricular activity) である。大学社会の文化は、教師と学生による共同活動と学生独自の集団活動とによって構成されるが、学生たちが基本的に所属感と安定感をもつことができるのは後者においてである。というのも、学生たちは、さまざまなクラブ、サークル、集合体への同一化によって一体感を得、それを一次的な相互作用共同体と見なすからである。かれらは、そこで「インパーソナルな世界でのパーソナルなもの」を獲得するである²⁷⁾。つまり、学生集団が大学社会の全体文化の中で一種の下位文化 (sub-culture) をもち、彼らはその学生文化 (student culture) を準拠枠として行動するのである。

だがこの状況は、日本とアメリカで大いに異なると思われる。K. レヴィンは、アメリカの教育的状況は、自由に振舞える領域が大きい反面、ある一線を画された境界を一步出ると強制的な扱いを受ける度合は著しく大きい——このことから、アメリカでは隣接領域間の境界鋭く、異質的な生活空間が多様に存在する、と述べ、これをドイツの状況と比較検討したが²⁸⁾、これと同じことが日本の場合にも当てはまるように思われる。すなわち、アメリカの場合、大学社会の文化自体が全体社会からみて下位文化的であると同様、学生文化も、フラタニティ・システム、デート、スポーツ活動の特異性に見られるように境界性を明確にもった下位文化なのである。これに対し、日本の大学社会と全体社会、また大学社会と学生集団との境界性はさほど明確でなく、融合的である。両者の間の社会的距離はそれほど大きくない。さらに学生文化は（許容的な青年の文化として存在する

とはいうものの）、それが大学生活を特徴づけるほどには顕著な様相を示していない（図5）。この境界の不明確さがもたらすものは、結局、参加度の低さである。つまり大学人は

第5図 下位文化としての学生文化 (S) と大学文化 (U)
(ア メ リ カ) (日 本)



(註) アメリカの場合…境界性明確、日本…境界不明確で融合的

大学社会へ排他的な関係において参加するというより、全体社会における一つの職務遂行形式として参加しているにすぎない。これは、過去において日本における知識人の生産ルートが窮極的に国家奉仕につながるような体制をとったことから、大学人が知的創造のために大学社会に参加する契機を失ったことに大きく原因している²⁹⁾。他方学生は、階層上昇の機関として大学を視る

27) Goldsen, R. K. op. cit., 64 ~ 65.

28) K. レヴィン (末永俊郎訳)・社会的葛藤の解決・創元社・昭29, 2—42頁。

29) 永井道雄「知識人の生産ルート」近代日本思想史講座・第4巻・筑摩書房・昭34, 214頁。Nagai, M. *Problems in the Modernization of Japanese Education*, 1966.

手段的態度から、また大学時代を、青春を満喫するための猶予的時期として受けとめる遊民的態度から、いずれも積極的に大学生活へ参加しようとする態勢をもち得ない。かくして下位文化への参加度の低さは、その境界性を不明確にし、大学外集団との融合的連続性を濃くするのである。そのことがひいては、カレッジ・ソシアライゼーションの効果を弱め、大学教育経験または大学生生活経験による態度形成や態度変化を小さくすることになる。

われわれは、ここで矛盾した結論を導いたことに気づく。一つは高等教育経験は、伝統的価値に対して批判的な進歩的意識や態度を形成し、それによって諸個人の内的葛藤を強めるというものであり、もう一つは、日本の大学文化の特殊性から、高等教育経験の態度形成に及ぼす影響は小さいという指摘である。だが、この一見矛盾して見える二つの主張は異なる文脈において理解されるとき正当に評価されるだろう。すなわち、日本の大学生はカレッジ・ソシアライゼーションによって意識変化をおこすよりも、全体社会の中の流動的なイデオロギーによって影響される度合いが大きいのであり、大学文化や学生文化は、それに対して補足的、支持的な規定作用をもつにすぎないのである。とはいっても、この特殊日本的動向に加えて、大学文化、学生文化のもつ自由に対する許容性、あるゆる原理からの解放性は、民主的な思考態度形成の基盤である。それゆえに高等教育経験は、基本的に、進歩的、葛藤的、逸脱的な価値態度を生み出す原動力として作用する可能性をもつのである。

<参考文献>

- S. ファーバー 他編（桂広介訳）、家庭は崩壊するか *Voice of America: Forum Lectures; The Family Series*, 誠信書房・昭42。大橋薫・増田光吉編・家族社会学・川島書店・昭41。宮沢洋子「婦人の役割研究に関する一つの視点」思想・532号。鶴見和子「家族における婦人の役割変化」（上下）思想・527号。浜口恵俊「近郊婦人の生活態度と価値観」竜谷大学論集384号。C・カー（茅誠司監訳）、大学の効用、東大出版会、1966。Murphy, L. B. et al (eds.) *Achievement in the College Years; A Record of Intellectual and Personal Growth*, 1960。Myrdal, A. & V. Klein, *Women's Two Roles; Home and Work*, 1956。Etzioni, A. & E. Etzioni (eds.), *Social Change: Sources, Patterns, and Consequences*, 1964。Corwin, R. G., *A Sociology of Education; Emerging Patterns of Class, Status, and Power in the Public Schools*, 1965, Lipset, S. M. ed., *Student Politics*, 1967。